

論理と客観性・感性と主観性—イメージスキーマと主観化の観点から

関西大学 鍋島弘治朗 naby@muf.biglobe.ne.jp

本稿では、まず第一に、鍋島(2003)に述べられた客観モード(以下、Oモード)と主観モード(以下Sモード)の区分¹が主観化(Langacker, 1990)の概念に沿って定義できることを確認する。次に、この定義による二つのモードの違いが異なるイメージスキーマ(Lakoff, 1987; Johnson, 1987)に関してどのような結果をもたらすか敷衍する。さらにこのOモードとSモードの起源が幼児の習得に見られることを認知発達の文献から検証し、この区分が認知的に重要な区分であることを主張する。

キーワード：客観モードと主観モード、主観化、イメージスキーマ、認知発達

1 上下・前後・遠近の対応

鍋島(2003)では以下の図1を表示し、遠と上が、近と下が対応することを述べた。

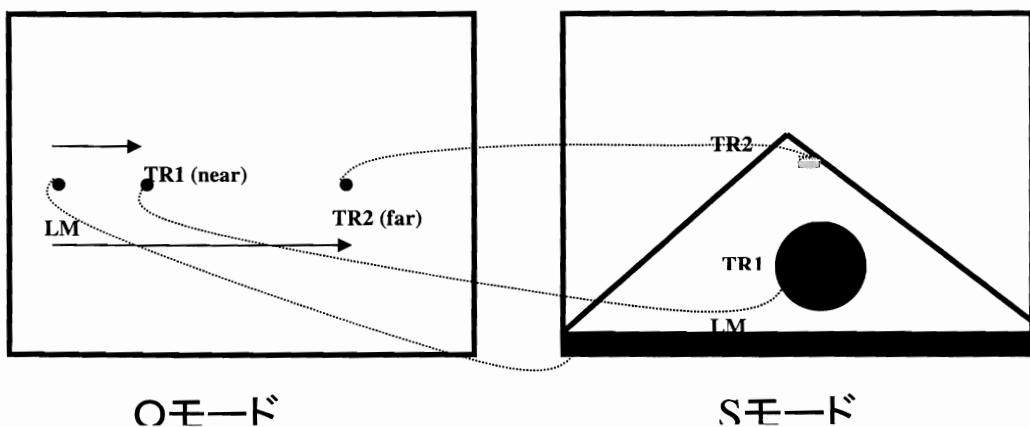


図1 遠近のSモードとOモード

2 主観性の定義

状況を切り取って表現する際、主観化(subjectification)の相違も問題になってくる。認知言語学でよく上げられる例はLangacker(1990)の例である(用例は多少変更)。

- (1) a. Anne is sitting across the table from Beth.
b. Anne is sitting across the table from me.
c. Anne is sitting across the table.

これに対応する図は、以下のようなものであろう。(原図はUehara, 1998)

¹中村(2004)にIモード、Dモードの区分があり本稿の区分はほぼ同一のものである。あえて中村との相違を述べれば、本稿では主観性を言語現象から厳密に定義しており、その射程は中村(2004)よりも小さい。本稿であげられた発達研究からの証拠は中村の区分のサポートにもなる。また、言語自体の主観性に関する包括的議論は、Ikegami(2005)を参照のこと。

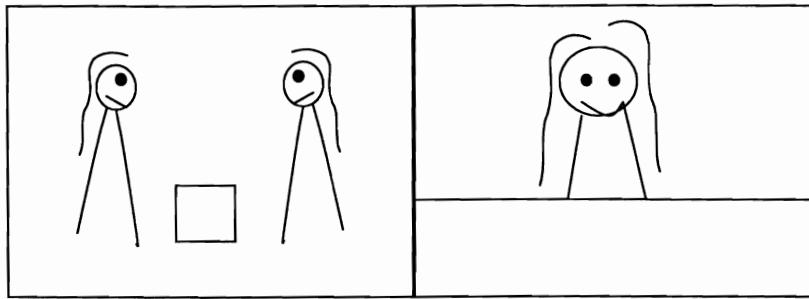


図 2 A is sitting across the table from B.

図 3 A is sitting across the table.

つまり、(1c)（図 3）では、*across* の基準点が言語的に明示されていないが、デフォルト的に発話者であると理解される。なぜなら、主観的な視点から Anne を見れば、自分自身は視野に存在せず、テーブルとその向こうに Anne が見えるだけである、という経験を日常われわれはしており、この文章を読んだとき、文章の意味がそのような経験の自然な反映として理解できるからである。その意味で、(1c)は、発話者である観察者の視点に写る主観的な映像をより直接的に反映した、主観的な言語用法であるといえる。

本稿では、Langacker (1990)の主観化の概念を基礎として O モードと S モードを定義する。

O モードと S モードの定義

- ・主体が場面（関係）の外に存在する場面（関係）認知を O モード（客観モード、3 人称モード）
- 主体が場面（関係）の中に存在する場面（関係）認知を S モード（主観モード、1 人称モード）とする。
- ・主体が場面の中にある場合、主体は場面に登場する項のひとつに同一化（ID）している。
- ・項とは、道具などを含むイベントの参与者および、イメージスキーマなど関係の部分（容器、内容物、起点など）とする。
- ・同一化（ID）とは、同一指標を与えること、またはその点に視点を持つことである。

S モードにおいて、主体は、ある参与者、ある場所などの項に同一化（ID）する。同一化できる項は通常複数存在する。同一化には、その参与者の例となれるか（人間、動物など存在論的な類似性の制約）あるいは、その地点に立てるか（視点をその場所に置くという隣接性設定の可能性）などの制約が生じる。

また、S モードと O モードの違いはあくまで項がすべて場面に登場しているか、主体がひとつの項になり、見えの場面からは項のひとつが減っているかである。

このような S モードと O モードの定義に従えば、(1) の用例の他、(2) ~ (5) の用例において、どうして a よりも b や c の方に主観性が感じられるかが説明できる。(2b) では、上司の視点、(5b) では Hiromi の視点が取られており、それは関係名詞などの一方が欠けていることから理解される。

(2) a. 上司と部下のよい関係を築くために

　　b. 部下とのよい関係を築くために

　　c. 上司とのよい関係を築くために

(3) a. A 組と B 組の騎馬戦の日がついやつてきた

　　b. A 組との騎馬戦の日がついにやつてきた

c. B組との騎馬戦の日がついにやってきた

- (4) a. 嫁と姑との戦いは続く
b. 嫁との戦いは続く
c. 姑との戦いは続く
- (5) a. (カップルの写真の下に) Hiromi with Ken, Jan 15, 2005
b. (カップルの写真の下に) with Ken, Jan 15, 2005.
c. (カップルの写真の下に) with Hiromi, Jan 15, 2005.

3 イメージスキーマとOモードおよびSモード

本小節では、イメージスキーマ（Lakoff, 1987; Johnson, 1987; Clausner and Croft, 1999）に提示されているイメージスキーマが両モードでどのように表示されるか、経路（Source-Path-Goal）のスキーマ、接触のスキーマ、容器のスキーマで検討する。

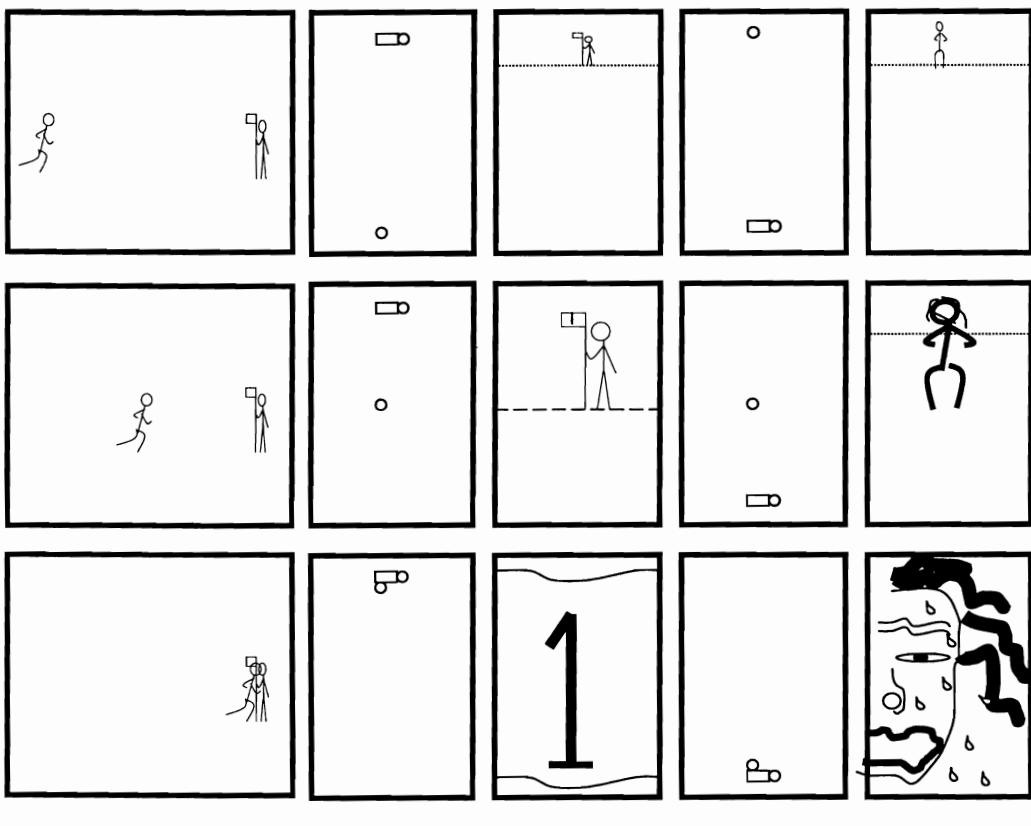


図4 起点—経路—着点と二つのモード

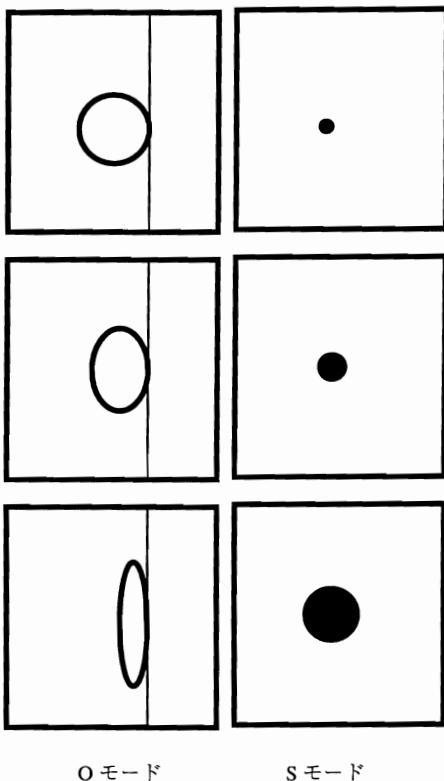
図4では、経路の一例として短距離走の場面を図示した。通常、経路のイメージスキーマにおける参与者は、移動物（TR）、Source（LM1）、Path（LM2）、Goal（LM3）となろう。TRは、LM1から移動を開始し、LM2を経てLM3に至る。図Xでは、走者がスタート地点からトラックを走り、ゴールに至るという具体例となる。

真ん中の図は、主体が TR に同一化した場合である。主体は、ゴールを遠くに眺める地点からスタートし、自分の体の力を出し、体を動かしながら移動をする。その際、もちろん、身体的苦痛、走る音、風、などが感じられることであろう。ゴール地点ではゴールの旗のはためきの音も聞こえるかもしれない。

一番右の図は、主体がゴール（ゴールで待つ人）と同一化した場合である。遠くに TR（走者）を見、スタート開始とともに、走者は次第に大きくなってきて、それ違うときには音、振動、風を感じられ、場合によっては汗も飛んでくるかもしれない。

それ以外の図は、主体（視点）がどれにも入っていないという意味、すなわち、3つの参与者がすべて場面の中に顕在化しているという点で O モードといえる。もちろん、ここには出さなかったが、左端の画像を反対側から眺めている人には、走者の走る向きは反対の右から左になる。

もちろん、ひとつのモードを取ったからといって他のモードがないわけではない。現在眼前で起こっている状況が、一般的な移動の状況の一種であり、自分はどの位置にいるのか常に追跡されている。つまり、S モードと O モードは、常に対応が取られている状態であるといえる。次に接触(contact)の度合いの例を挙げる。



O モード S モード

図 5 接触の二つのモード

A と B が接触する場合、O モードであれば、二つの存在が必要だが、S モードでは、相手側が感じられるだけである。その際、相手側は刺激または接触範囲として感じられ、接触が強まれば強まるほど、接触範囲は拡大し、接触の刺激は大きくなる。つまり、O モードにおける接触は、S モードでは、刺激の大小として捉えられる。次に容器の例を考える。これには、図 6 で示されるように、主体が移動物と ID する場合、および、主体が容器と ID する場合に二種類が考えられる。

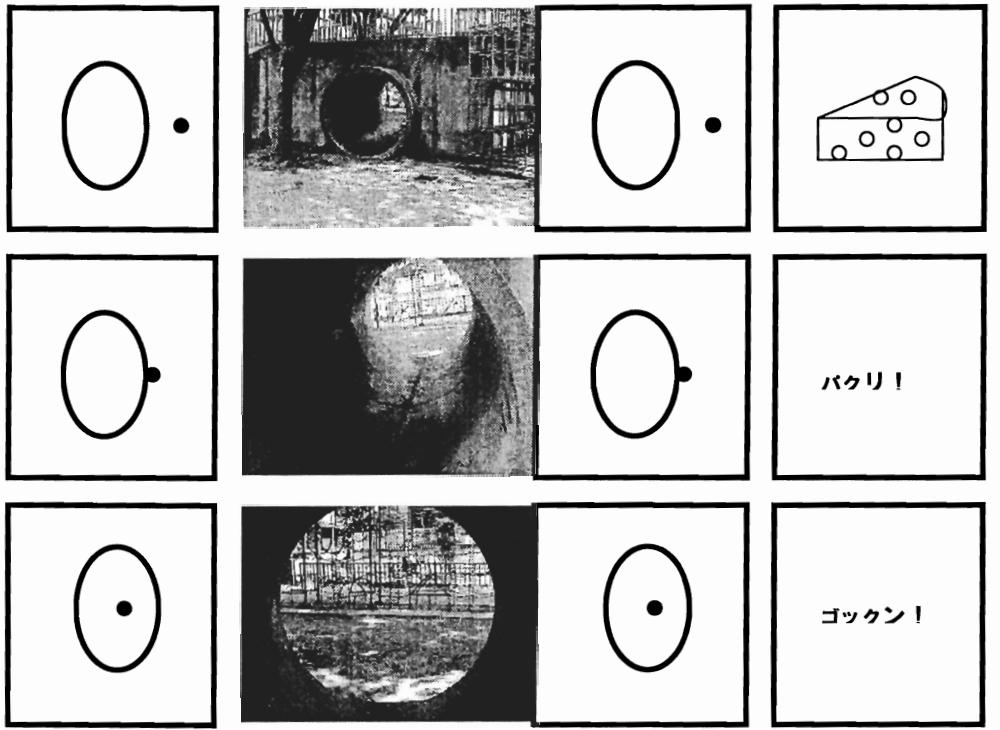


図6 容器のイメージスキーマと二つのモード

主体が容器自体になる場合、チーズを腹に収める人間の視野からチーズ自体は見えなくなる。しかし、チーズがどのようになったかどういう状態になったかを人間は把握しており、それは、口の中の感触、のど越し、腹の中の感覚など他の感覚による。

3 子供の発達研究からの両モードに対する証拠

本小節では、幼児の発達研究から両モードの発達の重要な一段階を区切っていることを述べる。

3.1 自己中心参照枠からの脱却

乾・安西（2001:80-82）では、乳児が当初自己参照枠（本稿におけるSモード）しか有していないことを示唆する二つの実験を紹介している。ひとつは、Acredolo (1978) の実験である。

乳児は正方形の部屋にいて、まず A の場所で部屋の中央から発せられるブザー音を聞く。その後にどちらか一方の窓（この場合窓 1）から乳児が興味を示す対象（人間の顔）が呈示される。これがくり返されると、乳児はブザー音がなるとまどから興味対象が提示されるより前に窓の方向を向くようになる。その後、乳児は B の場所に移動させられ、同じくブザー音を聞く。（原文ママ）この時、乳児がブザー音に随伴して呈示される興味対象を見るためには、先ほどとは（自己中心参照枠において）反対の方向に頭を向けなければならない。実験の結果、6 カ月児では、有意に窓 2 のほうに頭を向け、この時期の乳児の空間行動は自己参照枠に基づいていることが示された。

乾・安西（2001:81）

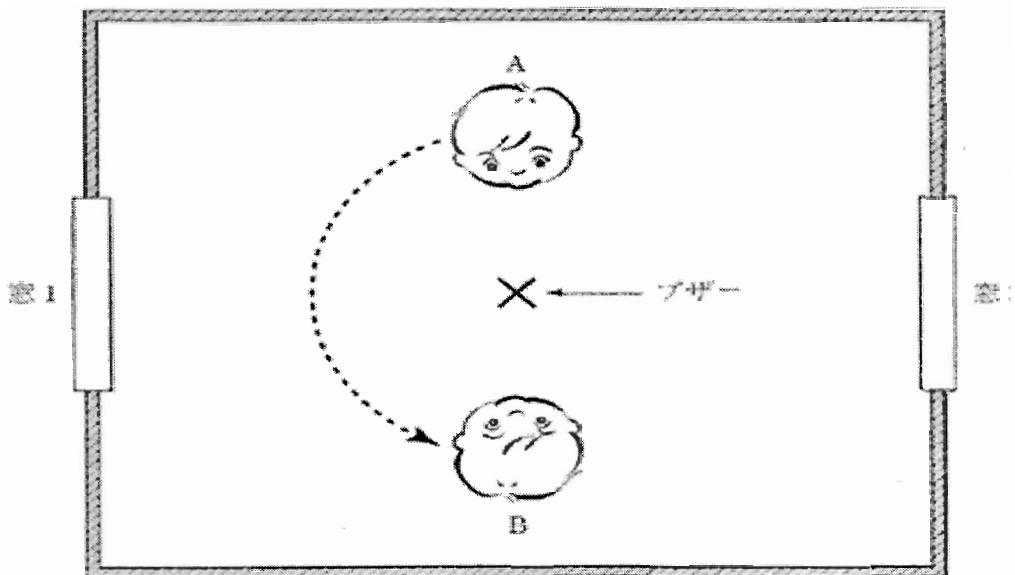


図 3.11 Acredolo(1978)の実験概要

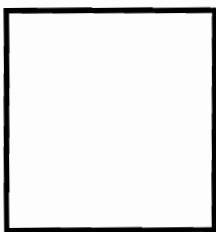
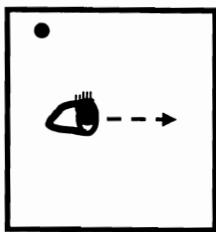
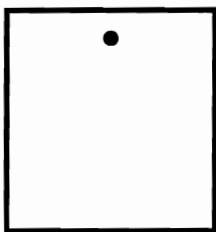
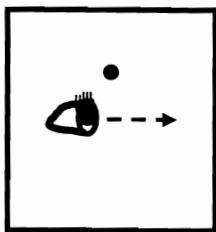
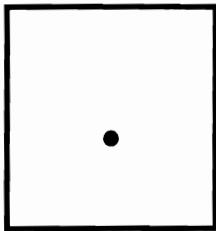
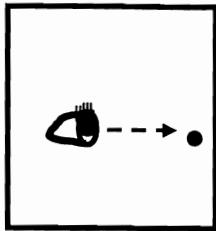
さらに、乾・安西は探索行動に関する Bower (1979) の実験を紹介し、同様の結果が見られることを論じている。

3.2 ピアジェの対象の永続性 (Object Permanence)

認知発達の古典であるピアジェの研究の中には、有名な概念として対象の永続性 (Object Permanence) がある。杉村・坂田 (2004) によれば、Piaget は、対象 (モノ) の概念の形成に関して、5つの段階を設定している (Piaget, 1937/1954)。

第4段階の解釈や対象の永続性が始まる時期に関する論争が多いが、対象の永続性と呼ばれる概念が存在し、乳児がある時期まで、対象の永続性を持たないことに関しては異論がないようである。誤解を恐れずに平易に言えば、対象の永続性とはすなわち、「目の前になくても存在は永続している」という考え方である。逆に、対象の永続性が獲得されていないというのは、「目の前からなくなると存在がなくなる」という考え方である。

対象の永続性は、本稿における S モードと O モードで以下のように記述することができる。すなわち、O モードでは、モノが視野外に移動しても、自分自身と対象がいずれも存在するものとして認識されるのにに対し、S モードでは、対象の存在が消えてしまう。一定年齢未満の自己中心参照枠のみしか持たない、すなわち客観世界を持たない乳児には消滅と感じられる。ピアジェの段階説では、一定年齢までの乳児は主観的世界のみを有し、その後客観世界的認識が発達することがわかる。これを両モードの図で表すと図 7 のようになる。



O モード

S モード（主体が視点の場合）

図 7 対象の永続性（Object Permanence）と二つのモード

さて、それでは、対象の永続性が獲得され、自己中心参照枠から環境中心参照枠が発達すると、それまでの自己中心的認識、本稿でいう S モードは失われるのだろうか。推測であるが、O モードが獲得された後、S モードが失われるとは考えにくい。それは、(1) ~ (5) のような S モードを反映すると考えられる言語表現が容易に理解できることから裏付けられる。加えて、何よりわれわれの視界の世界における入力は原理的に常に S モードであるといえるからである。よって、次のように考えることが理にかなっているといえるのではないか。

われわれは乳児の頃のある時期まで、S モードのみを有するが、その後 O モードが発達する。O モードの発達後は、両者が並存し、視覚など外部から感覚入力である S モードを元に、客観世界を構築する。S モードと O モードは対応関係が取られており、われわれは両モードの間を行き来する。

例えば、駅前に駐車した自分の車は自分に見えないところにあっても特段異常がない限り、その場に存在し続けていると理解している（O モード）。仕事場から駅前に戻る道筋の商店街を眺めながら（S モード）、自分が仕事場から遠のき、車に近づいていることを理解している（O モード）。車に辿り着き、運転席に座ると自分には見えなくても（S モード）自分が車の「中にいる」ことを理解している（O モード）。バックする際、実際には見えなくても（S モード）車のリアエンドがどの位置にあるのか、客観図で意識している（O モード）。だから、（予測にずれが生じて）主観世界においてガシャンという音と振動を経験すれば（S モード）、客観世界でどのような出来事が発生したか理解できる（O モード）。

4 まとめ

本稿では、まず第一に、鍋島（2003）に述べられた客観モード（以下、O モード）と主観モード（以下 S モ

ード）の区分が主観性（Langacker, 1990）の概念に沿って定義できることを確認した。次に、この定義による二つのモードの違いが異なるイメージスキーマ（Lakoff, 1987; Johnson, 1987）に関してどのような結果をもたらすか敷衍し、経路のイメージスキーマ、容器のイメージスキーマ、接触のイメージスキーマに関して、OモードとSモードの相違を検討した。さらにこのOモードとSモードの起源が幼児の習得に見られることを認知発達の文献から検証し、この区分が認知的に重要な区分であることを主張した。乾・安西（2001）に紹介された実験では、一定年齢までの幼児はSモードのみを有することが確認されている。この結果は、Piagetの対象の永続性（杉村・坂田, 2004）の考え方とも整合性がある。これらのことから、本稿における2つのモードの区分は認知発達の観点からも信憑性が高いことがわかる。

- Clausner, Timothy and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, pp. 1-31.
- Ikegami, Yoshihiko. 2005. Indeces of a 'subjectivity-prominent' language: Between cognitive linguistics and linguistic typology. *Review of Cognitive Linguistics* 3 Amsterdam: Benjamins
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作
他訳 「認知意味論－言語から見た人間の心」, 紀伊国屋書店, 1993年)
- Langacker, Ronald 1990. *Subjectification*. *Cognitive Linguistics*.
- Uehara, Satoshi. 1998. Subjective predicates in Japanese: A cognitive approach. Paper presented at the Research Issues for Cognitive Linguistics Workshop at the Australian Linguistics Institute in July 1998. (Forthcoming in Lachjenbroers ed. *Cognitive linguistics investigations across languages, fields, and philosophical boundaries*. Amsterdam: John Benjamins.
- 乾敏郎・安西祐一郎 2001. 「イメージと認知」 岩波書店
- 鍋島弘治朗 2003. メタファーと意味の構造性. 『認知言語学論考 No. 2』. ひつじ書房.
- 中村芳久. 2004. 認知文法論 II. 大修館書店.
- 杉村伸一郎・坂田陽子編 2004. 『実験で学ぶ発達心理学』 ナカニシヤ出版
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』 ぐろしお出版